

第3章 研究開発の内容

第3節 研究成果に基づく交流機会の増加と生徒の自立的成長の支援

第1項 学会・各種コンテストにおける参加発表

担当：釜谷 尚史

実施時期：平成30年4月～平成31年3月

場 所：神戸大学他

対象生徒：総合科学系2年次 54名 総合科学系3年次 43名

1.研究開発の経緯と目的

研究開発課題に「探究的・分野横断的に知識を活用できる人材の育成」を掲げている。この課題を解決するために、総合科学系に所属する生徒は個人またはグループ毎に課題研究に取り組んでいる。課題研究で得た成果は、校外で実施される学会等で発表することを促しており、本事業のプログラムの一つとしても位置付けている。

これまでの経緯から、校内の課題研究発表会などで研究発表を行い、外部での発表経験を経ることにより、研究活動の意欲や発表スキルの向上に良い影響が見られてきた。本年度においても、課題研究に対する意欲や発表スキルの向上及び研究活動のさらなる深化を目的に、主に阪神地区で開催される各種科学発表会に積極的に参加した。

2.仮説

日頃の研究活動の成果を発表する場に臨むことは、研究内容と課題を確認できる契機となりうる。更に大学・研究機関等外部からの参加者の意見を直接知る機会になり、今後の研究活動に対する幅が広がることが期待される。この仮説に基づき、本事業により育むことができる力は以下の通りである

	課題 設定力	企画 協働力	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
仮説	○	○			○	○	○

3.研究内容・方法

総合科学系生徒は課題研究に取り組む授業として、2年次は「特別探究①」(1単位)、3年次は「SSRⅢ」(1単位)を設けている。この時間を活用し、課題研究を進め、校外発表への準備に取り組んでいる。参加した発表会は以下の通りである。

発表会名	日時	参加
4 th Science Conference	7月14日	3年4グループ 10名 神戸大学
SSH 全国生徒研究発表会(神戸)	8月8,9日	3年1グループ 3名 神戸国際展示場
兵庫県高等学校総合文化祭	11月17,18日	自然科学研究部 6名 バンドー神戸青少年科学館
環境・防災地域実践高校生サミット	11月18日	1・2年1グループ 4名 尼崎小田高校
高校生・私の科学研究発表会	11月23日	2年6グループ 15名 神戸大学
SCI-TECH RESEARCH FORUM 2018	11月24日	2年4グループ 10名 関西学院大学
環境・防災地域実践高校生サミット	12月22日	1・2年1グループ 8名 京都大学

甲南大学リサーチフェスタ 2018	12 月 23 日	2 年 5 グループ 13 名 甲南大学
SGH・SSH 等高等学校課題研究 交流発表会	12 月 25 日	2 年 3 グループ 8 名 葺合高校
第 11 回サイエンスフェア in 兵庫	1 月 27 日	2 年 6 グループ 17 名 ニチイ学館ポートアイランドセンター他

その他、SSH 行事として全グループの中間発表会（ポスター発表）

行事	日時	場所	参加
尼崎小田高校との合同中間発表会	11 月 8 日	本校	2 年 19 グループ 54 名

4. 検証

総合科学系生徒には、3 年次夏休みまでに 1 度は外部の研究発表会に参加することを勧めている。その結果、2 年次は 19 班中 17 班が外部研究発表会で発表を終えている。

なお本年度から、発表会へ参加した場合は「校外課題研究発表会をまとめる思考整理ワークシート」の提出を課している。外部の先生方や同じ発表会に参加していた高校生等からの具体的な意見や不十分な点の指摘を記録として残すとともに、研究担当教員に発表会参加の成果を連絡するためである。「ワークシート」と、そこに記録されていた生徒の記述(抜粋)は以下の通りである。

校外課題研究発表会をまとめる 思考整理ワークシート	
2 年 組 番 名前	発表会終了後 1 週間以内に筆谷まで提出
1 参加した発表会データ	
発表日時 平成 年 月 日()	
発表会名 ()	
当日共同発表者 ①() ②() ③() ④()	
2 発表内容	
班番号・発表タイトル ()班()	
発表スタイル(口頭発表・ポスター発表・その他())	
3 発表会でいただいた質問・それに対する回答内容	
箇条書き・できるだけたくさん	
Q1	A1
Q2	A2
Q3	A3
Q4	A4
Q5	A5
4 発表会参加で得られたもの (課題・研究アドバイス・研究ヒント)	
箇条書き・できるだけたくさん	
.	
.	
.	
.	
.	

生徒の記述(抜粋)

- ゴールを考えて実験することが大切だと思う
- 自分たちが自身の研究をもっと理解する
- ポリフェノールによる酸化の理解をもう少ししっかりする
- 酸化の理由が本当に酸素なのか、イオンが酸化を防いでいるのか、元素が酸化を防いでいるのかが分かれば、応用がきく
- 大きすぎず、小さすぎず、ちょうどいい大きさの声で発表する
- 自分から発表を聞いてもらえるように勧誘する
- 野菜を触る時や培地を作る時は、アルコール消毒をする、フタをむやみに開けないなどに注意する

外部の研究発表会に参加することは、研究が推進されるとともに、取り組んできたことを分かりやすく伝える発表スキルの向上に大いに役立った。一方で、質疑応答の技術はまだ課題がある。具体的には、いただいた質問に的確に答えることや、発表を聞き、そこから研究に対する疑問に気付き、その場で発表者に質問を投げかけることである。今後は質疑応答に特化した授業内容の考案や、積極的に外部発表会に参加することで場に慣れていくことが大切である。

3.3.2 特別講義の実施

担当：受川 達也

実施時期：平成30年6月～平成31年3月

場 所：本校理科実験室等

対象生徒：全校生徒のうち希望生徒

1.研究開発の経緯と目的

科学に高い能力を有する生徒の力の向上や課題研究・神戸学の推進を図るため、連携機関等の特別講義を実施した。研究者や参加者同士で議論を交わし、研究に対する新たな視点や手法を学び、探究する力の向上を図ることを目的とした。

2.仮説

神戸の街と関わりの深い機関と連携しながら特別講義を実施することで、神戸市が持つ地域特性を『多彩な知の資源』として最大限に活用しながら生徒の力を向上することができる。講師や参加者同士で議論を交わすことで、課題研究や神戸学に生かせる課題を見つけたり、講義を受講することで視野が広がり、学びを社会との関係で捉えることができたりするようになると考えられる。以上より、本事業により育むことができる力は以下の通りである。

	課題設定力	企画協働力	論理考察力	自己学習力	表現理解力 発表	表現理解力 質問	ICT 活用力
仮説	○		○				

3.研究内容・方法

第1回特別講義

日 時 6月1日(金) 15時45分～17時15分

タイトル 神戸の身近な生き物ー散策を通した学校周辺の生き物観察ー

講 師 鈴木 武 先生 (人と自然の博物館研究員・兵庫県立大学講師)

内 容 神戸の動物や植物の講義を受講した後、学校周辺を散策した。六甲アイランドに生息する植物や動物を観察し、生態を学んだ。

第2回特別講義

日 時 7月19日(木) 15時45分～17時15分

タイトル 垂水日向遺跡から発掘された鬼界アカホヤ火山灰の観察

講 師 香田 達也 先生 (神戸大学海洋底探査センター講師)

佐藤 鋭一 先生 (神戸大学大学教育推進機構助教)

内 容 神戸・垂水日向遺跡から発掘された「鬼界(きかい)アカホヤ火山灰」を観察し、周辺に活火山がない神戸においても、かつて大規模な火山災害が起こったこと、火山活動に対する今後の備え等を学んだ。

第3回特別講義

日 時 7月30日(月) 8時00分～17時00分

タイトル 臨海実習

講 師 羽生田 岳昭 先生 (神戸大学内海域環境教育研究センター)

牛原 康博 先生 (神戸大学内海域環境教育研究センター)

内 容 詳細は P.46 を参照

第4回特別講義

日 時 11月22日(木) 15時30分～18時15分

タイトル 神戸の水ー東水環境センターにおける水質維持ー

講 師 松木 靖 先生 (神戸市建設局東水環境センター管理課長)

内 容 海底トンネルを東灘処理場から六甲アイランドまで歩く体験をし、毎日利用している水がどのように処理され、再生されているのかを学んだ。

第5回特別講義

日 時 12月20日(木) 15時45分～17時15分
 タイトル 酵母と麹菌のはなし-日本酒造りで活躍する微生物-
 講 師 山内 隆寛 先生 (白鶴酒造株式会社 研究員)
 内 容 日本酒造りに欠かせない麹菌と酵母菌の働きについての講義を受講した。

第6回特別講義

日 時 2月4日(月) 15時45分～17時15分
 タイトル イカの解剖実習
 講 師 早瀬 晋 先生 (シオノギ製薬 研究員)
 内 容 イカの構造について講義を受講した後、イカの解剖を行い、内臓などの構造を確認した。

第7回特別講義

日 時 2月12日(火) 15時45分～17時30分
 タイトル 技術が何に役立つのか？
 講 師 鳥居 敬 先生 (川崎重工業株式会社コーポレートコミュニケーション部長)
 内 容 川崎重工が持つ技術が社会にどのように貢献するのかについて講義を受講した。

第8回特別講義

日 時 3月6日(水) 10時00分～12時00分
 タイトル 課題研究における考察力
 講 師 甲元 一也 先生 (甲南大学准教授)
 内 容 課題研究における考察のポイントについて学んだ。

第9回特別講義

日 時 3月7日(木) 13時00分～16時00分
 タイトル ゴムの科学—ゴムの加硫を体験し、評価・分析をしよう—
 講 師 バンドー化学株式会社研究員
 内 容 ゴムが生活の様々な場面で活躍していることについて講義を受け、ゴムの加硫の仕組みについて学んだ。

4.検証

成果を検証するため、6つの力のうちのどれが向上したかを問うアンケートを実施した。参加した生徒が各力に対して向上したと思うと回答した割合の平均が60%を超えた項目は以下の通りである。

	課題 設定力	企画 協働力	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
検証	○		○			○	

課題設定力の結果より、疑問や課題を見つけることが十分にできたという仮説通りの結果を得ることができた。また、昨年度と違い論理考察力についても向上したと回答する生徒の割合が増えていた。今年度は特別講義に参加申し込みを行う際に、事前に疑問点などを集約し講師に事前に伝えていたため、講義の内容に生徒が疑問に感じていることを追加で講義してもらったことが、昨年度よりもより深く講義の内容を理解することができた要因だと考えられる。

3.3.3 臨海実習

担当：岩本 哲人

実施時期：平成30年7月30日(月)～31(火)

場所：神戸大学内海域環境教育研究センター(淡路市岩屋)
淡路島モンキーセンター (洲本市畑田組)

対象生徒：総合科学系2年次 4名、情報科学系2年次 1名、1年次 8名

講師：羽生田 岳昭先生 (神戸大学 理学部生物学科 助教)
貝ヶ石 優 (大阪大学 人間科学研究科 特別研究員)

1.研究開発の経緯と目的

本事業は今回で7回目である。神戸大学内海域環境教育研究センターにて臨海実習を行い、淡路島モンキーセンターにて野生ニホンザルの観察を行った。この事業を実施した目的・ねらいは専門的に深く追及する探究心と分野横断的に知識を活用する創造性を併せ持った探究型人材の育成である。

2.仮説

本事業により、育むことができる力としての仮説は以下の通りである。

	課題 設定力	企画 協働力	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
仮説	○	○	○	○	○	○	○

3.研究内容・方法

仮説を検証するために行った研究内容は以下の通りである。7/30(月)プランクトン採集をし、神戸大学マリンサイトにて、光合成色素の分離、プランクトンの観察、海藻採集と標本作成を行った。7/31(火)午前は1日目の実習報告会を行い、午後に淡路島モンキーセンターにて動物行動学実習を行った。研修教材としての位置づけは、生物基礎の「生態系での物質の循環」及び生物の「海洋の食物網」、「生物の系統」、「個体群とその変動」である。特に野生ニホンザルについては個体識別の方法を研究者から学んだ。集団全体の寛容性についても観察実習を行うことができた。直径8mの円内にエサをまき、何頭入るか調べると約160頭であった。他の地域の野生ニホンザルでは20頭程度しか円内に入れないので、なぜエサを奪わないのかが研究者のテーマとなっている。

臨海実習の概要

台風の影響が心配されたが、今年度はほぼ計画通りの実習を行うことができた。

日時		学習項目・指導者・実施場所
7月30日	午前	バス乗車 出発、 淡路島・岩屋港到着 実習 プランクトンの採集 マリンサイト着 実習 プランクトンの観察 実習 光合成色素の実験 TLCによる光合成色素の分離 講師：羽生田岳昭先生、牛原康博氏

	午後	バス乗車、大磯着 実習 海藻採集 マリンサイト着 実習 海藻標本の作製 海藻組織の観察 宿舎 臨海荘へ移動 ◎夕食後: 実習 レポートスライド PP 作成・発表練習
7月31日	午前	バス乗車・宿舎 発 マリンサイト着 前日のまとめ・成果報告会 講師: 羽生田岳昭先生
	午後	バス乗車 出発 淡路島モンキーセンター 到着 実習 野生ニホンザル行動観察 実習 8m エサまき実験 講師: 貝ヶ石優氏 バス乗車 出発 本校着 解散

4. 検証

成果を検証するためにアンケートを実施した。各自の力が向上したと思うと回答した割合は以下の通りである。

	課題 設定力	企画 協働性	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
検証	85%	46%	38%	38%	38%	38%	46%

今回の事業では生徒たちは2日間とも良く活動した。特に臨海実習は大変意欲的に実習に取り組んでいた。ご協力下さった神戸大学の先生方のお陰である。また淡路島モンキーセンターでは動物の個体識別の方法や研究方法について直接研究者の話が聞けたことは非常に良かった。今後の改善点は、プログラムのさらなる充実と天候不順の際の対応策の検討であろうと思う。対象を1・2年としているため、隔年で内容を入れ替えて参加人数を確保する必要もある。

3.3.4 自然科学研究部の活動実績

担当：澤井 梓

1. 研究開発の経緯と目的

本校の科学系部活動として自然科学研究部がある。理科実験室内で多様な生物を育てる他、探究活動、課題研究発表、文化祭などでの展示、六甲アイランドの催し物、夏季休暇中の合宿、生物採集・飼育、実験教室など、年間を通じてさまざまな取組を実施してきた。昨年度までは、構成生徒の殆どが総合科学系に所属しており、研究活動・生物飼育などの活動を中心として活動してきた。しかし、今年度は、芸術系、国際人文系など様々な興味をもった生徒が増加したため、研究活動の活性化だけでなく、外部の学会や科学イベントへの参加など対外的な活動の活性化も新たに目的とした。

2. 仮説

自然科学研究部は、生徒が自主的にさまざまな自然科学に関する活動に参加することを大きな目的としている。そのため、部内で取り組む探究活動の計画の立案及び、実行に日頃から取り組んでいる。また、今年度は実験活動や生物に親しむイベントへの参加計画の立案についても生徒自ら行うように促した。これらの活動は課題設定力、企画協働力、論理考察力、自己学習力の醸成に寄与すると考えられる。また、1年間の活動や研究の成果を外部に発表する場を毎年複数回に設けており、この活動を通じて、表現理解力やICT活用力が育まれると期待される。

ゆえに、この仮説に基づき、育むことが予想される6つの力は以下の通りである。

	課題 設定力	企画 協働力	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
仮説	○	○	○	○	○	○	○

3. 研究内容・方法

(1) 部員数の推移

今年度の部構成生徒は21名となっている。そのうち、今年度入部した1年次の生徒は7名である。昨年の入部数が2名であったことを考えると、今年度力を入れた部員勧誘が実を結んだ結果である。一方構成生徒のうち12名は3年次の生徒であるため、来年度も継続して部員増加に努める必要がある。その一助となるべく、今年度は例年に比べて、生徒の関心が高い現地調査やボランティア活動などの行事を増加させた。

(2) 活動内容

今年度実施した主な取組は以下の通りである。今年度は兵庫県立尼崎小田高等学校主催の「平成30年度環境・防災地域実践高校生サミット」の活動に自然科学研究部が実行委員として参加し、研究発表等を行った。活動を通して、瀬戸内地域の他校の高校生と交流することで、リーダーシップやコミュニケーション能力が身についた。

また、昨年度から継続して毎月1回六甲アイランド野鳥園での池の水質調査と生物調査を実施している。今年度は、比較研究のための、ポートアイランドの人工池においても水質調査と生物調査を実施した。

さらに、今年度は3月に滋賀県琵琶湖周辺で水質調査と生物調査を行う行事と六甲アイランドチューリップ祭りへの参加を計画している。

日程	内容	具体的な方法
3月30日	兵庫運河調査	兵庫運河でアサリの生息調査
5月8日	市民花壇ボランティア	チューリップ球根抜き
6月1日	SSH 特別講義	人と自然の博物館の鈴木先生の実習
6月2日	神戸山手大学 ホタル観察会	宇治川のホタルについての講習会と観察
6月14～15日	六愛祭	
7月28日	サイエンスコンテスト	神戸市の中学生を対象に実験教室
7月31日	高校生フォーラム第1回実行委員会	地域実践探究スキルワークショップに参加
8月1日	English Island	
8月13日	兵庫運河調査	兵庫運河でアサリの生息調査
8月20～21日	自然科学研究部校外合宿	三田で自然観察を目的とする校外合宿
9月1日	高校生フォーラム第2回実行委員会	地域実践探究スキルワークショップに参加
9月8～9日	科学の祭典	バンドー神戸青少年科学館で実験教室
11月10日	生物多様性シンポジウム	王子動物園で研究発表
10月28日	高校生フォーラム第3回実行委員会	地域実践探究スキルワークショップに参加
11月17～18日	兵庫県高等学校総合文化祭 自然科学部門発表会	バンドー神戸青少年科学館で研究発表
11月18日	環境・防災地域実践高校生サミット 高校生フォーラム第4回実行委員会	兵庫県立尼崎小田高等学校で研究発表
12月22日	高校生フォーラム第5回実行委員会	京都大学で研究発表
1月12日	私たちの科学のつどい	バンドー神戸青少年科学館で実験教室

(3) 研究活動の活性化

今年度の自然科学研究部では研究活動に積極的に取り組んだ。その結果を発表するために、新たに生物多様性シンポジウムにも参加した。昨年度の研究成果をより発展させるため、『野鳥園にはなぜ魚がないのか』という題で、本校付近にある人工の溜め池(以下、野鳥園)の水質と生息する生物についての関係を明らかにする研究を進めている。この研究のため、月1回野鳥園を訪れ、生物観察及び、各種水質調査を実施している。また、六甲アイランドの花壇を管理されている、六甲アイランドを美しい街にする会の方の協力で実施している『生ゴミコンポストの効率化』をテーマとした実験を来年度から進めていく予定である。現在、すでに生ゴミコンポストを利用しているが、肥料化が上手くいかないという問題がある。本校の実験系で安定して肥料化が行えれば、今後、美しい街にする会の方が管理する花壇に場所を移し、実験を拡大していく予定である。

4. 検証

部内研究活発化を行うべく、昨年度に引き続きさまざまな点で創意工夫を行った。また、部員の研究意欲の高まりによって、部全体の士気が高まり、活動内容の拡大や活性化が促された。この活動実績は部活動の実績だけに留まらず、総合科学系の他の生徒や、全校生徒にも大きな実績として受け止められている。また、六甲アイランドを美しい街にする会が運営する花壇の世話や地域住民の方が参加するイベント等のボランティア活動に継続して参加していることも評価されている。これらの活動を通じて自然科学研究部が更なる高みへと上っていけるよう研鑽を重ねていきたい。

3.3.5 咲いテク事業および科学技術人材育成重点枠への参加

担当：吉岡 義訓

実施時期：平成30年5月～平成31年1月

場 所：各会場

対象生徒：総合科学系、自然科学研究部の希望生徒

1. 研究開発の経緯と目的

兵庫県では、昨年度まで科学技術人材育成重点枠に指定されていた神戸高校が事務局となり兵庫「咲いテク」事業推進委員会を組織している。神戸高校は平成25年度より29年度までの5年間に渡り科学技術人材育成重点枠に指定されており、兵庫「咲いテク」事業推進委員会を組織して「サイエンスフェア in 兵庫」や「Science Conference in Hyogo」といった兵庫「咲いテク」プログラムを実施している。兵庫「咲いテク」事業推進委員会は兵庫県でSSHの指定を受けている明石北高校、尼崎小田高校、加古川東高校、神戸高校、三田祥雲館高校、龍野高校、豊岡高校、六甲アイランド高校、武庫川女子大学附属中学校・高等学校の9校の校長および教員が委員を務め、高大産連携による科学技術系人材の育成を目的とした取組を実施する。

また、平成27年度より科学技術人材育成重点枠に指定されている尼崎小田高等学校の「環境・防災地域実践高校生サミット生徒事項委員会・地域探求スキルワークショップ」に幹事校として参加する。尼崎小田高校は平成27年度より平成31年度までの5年間に渡り科学技術系人材育成重点枠に指定されており、「環境・防災地域実践高校生サミット生徒事項委員会・地域探求スキルワークショップ」を組織して、環境・地域・防災に関する様々なワークショップを実施している。幹事校は大阪市立東高校、神戸市立六甲アイランド高校、兵庫県立尼崎小田高校、兵庫県立神戸商業高校、岡山県の山陽女子中学校・高校、広島県の安田女子中学校・高校、広島県立広島国泰寺高校の7校である。

科学技術系人材の育成を目的とした2つの事業に参加することにより、参加生徒に多様な経験をさせることができる。また、委員や幹事校として本校主催の事業を実施することにより他校の生徒へ多様な経験の場を提供することができる。

2. 仮説

科学技術系人材の育成を目的とした兵庫「咲いテク」プログラムと「高校生サミット生徒事項委員会・地域探求スキルワークショップ」の2つの事業への参加を通して、他校の生徒と交流することにより企画協働力を育むことができると思われる。また、発表会やワークショップに参加することで発表と質問に関する表現理解力や論理考察力を育むことができると思われる。

本事業により、育むことができる力は以下の通りである。

	課題 設定力	企画 協働力	論理 考察力	自己 学習力	表現理解力		ICT 活用力
					発表	質問	
仮説		○	○		○	○	

3. 研究内容・方法

今年度実施する兵庫「咲いテク」プログラムおよび「高校生サミット生徒事項委員会・地域探求スキルワークショップ」事業のうち、本校生徒が参加したものをまとめる。

分類	日程	事業名	場所	主催	参加者数
咲いテク	7月14日	Science Conference in Hyogo	神戸大学	咲いテク	本校生徒10名 他校生徒多数
咲いテク	7月23～ 7月24日	科学交流合宿 in 武庫川	武庫川女子大学附属中学校・高校	武庫川女子大学附属中学校・高校	本校生徒2名
環境・防災地域実践高校生サミット	7月28日	第1回生徒実行委員会・地域探究スキルワークショップ	須磨海岸 須磨海浜水族園	尼崎小田高校	本校生徒3名 他校生徒35名
咲いテク	8月1日	English Island 2018 / Summer	六甲アイランド高校	六甲アイランド高校	本校生徒20名 他校生徒11名
環境・防災地域実践高校生サミット	9月1日	第2回生徒実行委員会・地域探究スキルワークショップ	三郎島漁港(岡山)	山陽女子高校	本校生徒4名 他校生徒53名
環境・防災地域実践高校生サミット	10月28日	第3回生徒実行委員会・地域探究スキルワークショップ	人と防災未来センター	尼崎小田高校	本校生徒4名 他校生徒42名
環境・防災地域実践高校生サミット	11月18日	環境・防災地域実践活動高校生サミット	尼崎小田高校	尼崎小田高校	本校生徒4名 他校生徒69名
環境・防災地域実践高校生サミット	12月22日	環境・防災地域実践活動高校生サミット 高大連携フォーラム in 京都大学	京都大学	尼崎小田高校	本校生徒8名 他校生徒45名
咲いテク	1月27日	サイエンスフェア in 兵庫	ニチイ学館 理化学研究所 甲南大学	咲いテク	本校生90名 他校生徒多数

本校が主催で実施した事業は「English Island 2018 / Summer」については第3章第2節第4項「English Islandの開発」に記述している。本校ではこれまで兵庫「咲いテク」プログラムの一環として「科学英語実験講習会」を実施していた。今年度は、これまで開発していた校内語学研修プログラム「English Island」を兵庫「咲いテク」プログラムの一環として実施し、県外を含む様々な高校へ案内を行った。

「咲いテク」事業に関しては総合科学系の生徒のうち、希望生徒が主に参加した。「環境・防災地域実践高校生サミット」事業に関しては自然科学研究部所属生徒のうち、希望生徒が主に参加した。

4.検証

本事業に関しては、科学技術人材育成重点枠への参加が基本のため、各研究開発が生徒の6つの力にどのように影響を及ぼしたか明らかにするアンケート調査を実施していなかった。しかし、科学技術人材育成重点枠に参加することでどのような成果が出たのかを検証する必要があるため、来年度は事業に参加するごとにアンケートを実施する必要がある。

また、各事業では主催の学校の生徒が中心となって運営していたが、本校が主催した English Island 2018/Summer に関しては教員が中心となった取組であった。来年度は生徒の主体性を生かした取組を実施したい。